



Title	フフノール・モンゴル「ゲセル」の比較研究
Author(s)	新巴雅尔
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58759
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	新巴雅尔
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第23号
学位授与年月日	平成15年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	フフノール・モンゴル「ゲセル」の比較研究
論文審査委員	主査 教授 橋本 勝 副査 教授 佐々木 猛 副査 教授 藪 司郎 副査 助教授 塩谷 茂樹 副査 京学園大学教授 若松 寛

論文の内容要旨

本論は中国青海省に居住しているウールド・モンゴル人の間に流伝しているフフノール・モンゴル「ゲセル」資料をチベット「ケサル」、モンゴル書面「ゲセル」、ブリヤート「ゲセル」の各資料、フフノール・モンゴル英雄叙事詩資料と比較分析しつつ、モンゴル「ゲセル」の発生、発展、流伝の様々な問題とそれら相互間の関係を検討したものである。また同時に、フフノール・モンゴルに語られているゲセル風物伝説の特徴を説明しつつ、フフノール・モンゴル人のゲセルに対する崇拝につき考察している。

モンゴル「ゲセル」の研究はフフノール・モンゴル人学者ソンバハンプ・イシバルジャル(Sümbe qambu isibaljar)¹の「全書」の「問答卷」にある「ゲセル(「ケサル）」についての話から数えれば200年以上の歴史を有しているが、この200年以上に及ぶ研究の中で、フフノール・モンゴル「ゲセル」の資料を研究対象として取り上げ、「ゲセル」研究の一資料とすることはこれまでになかった。モンゴル「ゲセル」研究の主要資料としてフフノール・モンゴル「ゲセル」を用いたのは本論が最初である。

フフノールには13世紀からモンゴル人が移住し始めた。特に17世紀前半、グーシ・ハンがオイラド・モンゴルを率いてチベット高原に侵入した際、多くのモンゴル人が青海へ移住したため、青海のモンゴル人はウールド・モンゴル²と呼ばれる。

青海の広い草原でモンゴル人がチベット人と関わり合い、言語、宗教、文学などの様々な分野で接触することにより、モンゴル人の中にはチベット仏教が広がり、チベット古典

¹ 生没年1704-1788年。

² 新疆のオイラドから青海へ移住したモンゴル人のこと。

³ ここでは「本土」という言葉をハルハ・モンゴルと内モンゴルという意味で用いている。

文学がモンゴル語に翻訳され、それと同時に「ケサル」を始めチベットとインドの口承文学が広範囲に伝わった。そのチベットから伝わってきた文学の中で、「ゲセル」がモンゴル地方で最も広く流伝すると同時に再創作がなされ、モンゴル特有の「ゲセル」となり、モンゴル地方では誰もが知る物語になったのである。

青海のフフノール・モンゴル人は何百年もの間、モンゴル本土³から離れており、交通、通信の発達していなかった当時においては本土からの新しい文化の影響はなかなか及ばず、微弱であったろうが、他方、隣接するチベット人の文化に大いに影響されていたことと思われる。そのため、ウールド・モンゴル人の中にはチベット文化が流行したと同時に、古い伝統文化があまり改められることなしにモンゴルの本土より多く残っている。

1980年より、フフノール・モンゴル「ゲセル」を中心とするウールド・モンゴルの伝承文学の収集、記録、出版がようやく開始された。筆者はその調査グループの一員として参加することにより、フィールドワークを通してフフノール・モンゴル「ゲセル」について認識を深めることができ、さらに資料を収集できた。それらが本論で検討する主な資料になっている。フフノール・モンゴル「ゲセル」資料をモンゴル「ゲセル」の発生、流伝に関する様々な問題を研究する上での重要な資料として用いるという考えも、現地でフィールドワークを行った際に生まれたものである。

今までに収集したフフノール・モンゴル「ゲセル」には15人の語り手が語った計48章分の資料がある。その中で、異なる語り手が語った同一の、或いは類似した内容をまとめると計16章分の語りになる。その16章の中で、チベット「ケサル」の基本的内容と類似した内容の語りがある6章分存在する。比較考察した結果、その6章分の語りがあるモンゴル書面「ゲセル」にも一致する、或いは対応可能な内容があることが判明した。モンゴル「ゲセル」の源流と言えはこの6章に含まれるチベット「ケサル」と類似した内容とプロットである。

モンゴル「ゲセル」の元となるその内容などが、何時、どこから、どのようにしてモンゴルへ流伝したかということ、現地調査で入手したフフノール「ゲセル」の語り始めについての言い伝えを分析し、モンゴル人がフフノールへ移住した歴史的背景とあわせて説明した。

チベット「ケサル」は数多くの版本、手抄本があり、また、現在も多くの「ケサル」の語り手が活躍している。研究者の研究に依れば、チベット「ケサル」も最初には本論においても検討した「格斯爾王伝__貴徳分章本」のようなケサルの一生を語った本が元となったようだ。フフノール・モンゴル「ゲセル」の基本となる6章の内容をチベット「ケサル」と比較分析すると「格斯爾王伝__貴徳分章本」に語られている内容はモンゴル「ゲセル」の最初の内容でもあったと考えられる。

『北京木版「ゲセル」』について、ロシアのブリヤート系のモンゴル人学者Č・ジャムツァラノ（Č.Jamčarano）が一人の博学のラマ僧から聞いたという言い伝えによると、この本は「1630年に、ウールド部の語り手の語りを記録したもの」であるという。これが事実であることを証明できる根拠はなかった。本論で、モンゴル人の間に流布した書面「ゲセル」の各版本、手抄本の内容をまとめ、フフノール・モンゴル「ゲセル」資料と比較分析し、一致する部分と一致しない部分を説明した。

「ゲセル」は内モンゴル、今のモンゴル国、ブリヤート・モンゴル、オイラド・モンゴルに書面で流伝してきた。フフノール・モンゴルにも書面「ゲセル」があったという言い伝えがある。モンゴル語に翻訳された「リン・ゲセル」以外の8種類の「ゲセル」各版本、手抄本の計91章の内容のうちで一致する、或いはおおそ一致する内容をまとめると、基本的な内容は13章に分類することができる。これを代表するのが、『北京木版「ゲセル」』7章と『隆福寺「ゲセル」』6章である。『北京木版「ゲセル」』第6章、『隆福寺「ゲセル」』第10章では「悪魔のラマが奸計を使ってゲセルを驢馬に変える」という基本的に一致する内容を語っているので元々は同じ内容であったが、異なって流伝した二つの章と考えられる。『隆福寺「ゲセル」』の第11章「ゲセルはラヒキス・ハンを退治する」、第12章「ゴンブ・ハンを退治する」、第13章「ナチン・ハンを退治する」も後代の人が『北京木版「ゲセル」』の第4、5章などの内容をまねて創作したものと見られている。それで、『北京木版「ゲセル」』7章、『隆福寺「ゲセル」』第8、9章はモンゴル書面「ゲセル」の原初の内容と見られる。この9章の内容を全部収録しているのが『ノムチハトン「ゲセル」』（nomči qatun-u geser-ün turyūji）¹である。

フフノール・モンゴル「ゲセル」にあり書面「ゲセル」と比較できる6章は、第一章の「天の子が地上へ降誕する」；第二章の「マンガス（悪魔）の顎を分解して退治する」；第三章の「競技で頂点に立ち、ハーンになって妃を娶る」；第四章の「十二の首をもつマンガス（悪魔）を退治して金髪の妃を救う」；第五章の「狩猟の途中矢の名手である妃に出会う」；第六章の「シャライゴルの三ハーンを退治する」である。

フフノール・モンゴル「ゲセル」を『北京木版「ゲセル」』と比較してみると一致する部分もあるが、相違する部分も多くある。この一致する、或いはおおそ対応させることが可能な内容に基づいて、『北京木版「ゲセル」』とフフノール・モンゴル「ゲセル」の基本的内容は同じ源流に遡ると判断して間違いないと思う。

ブリヤート「ゲセル」もモンゴル「ゲセル」の中の重要な資料である。19世紀初期、ブリヤートで発見された書面「ゲセル」の数少ない章節は、『北京木版「ゲセル」』、『隆福寺

¹ 1940年代、モンゴル国アルハンガイ県(aru qaygai aimay)で発見され、モンゴル国立中央図書館に収蔵されている。全書10章、手書き、紙のサイズは62.5cm×17cm、1960年、新たに書写し、ウランバートルにて影印本として出版した。1988年8月、内蒙古「格斯爾」弁公室の研究員ゲレルジャブ(Gereljab)氏が校勘注釈して、内蒙古文化出版社から再度出版した。

「ゲセル」のある内容と一致する部分であった。比較分析するとブリヤート口頭流伝「ゲセル」の基本的内容もモンゴル書面「ゲセル」から取り入れた。ブリヤートの神話などの伝承文学のプロットも多く含まれている。

本論でブリヤート「ゲセル」とフフノール・モンゴル「ゲセル」の独特な内容を比較分析し、類似点、相違点を説明している。

モンゴル「ゲセル」はチベット「ケサル」に由来するが、しかし、モンゴル人の語り手の語りにより、モンゴル伝承文学の土壌で流伝されてきたため、チベット「ケサル」と相違する大きな面がある。フフノール・モンゴル「ゲセル」は、ウールド・モンゴル人の語り手、ウールド・モンゴルの伝承文学の土壌で流伝されたことから、他のモンゴル地域の「ゲセル」とも異なった独特の内容と特徴を有する。本論でフフノール・モンゴル「ゲセル」をフフノール・モンゴルの英雄叙事詩と比較分析し、内容、構造、形式、言語表現の面で英雄叙事詩から影響を受けたことを説明している。

本論では、フフノール・モンゴルに語られているゲセル風物伝説にも触れた。モンゴル地方の殆どの地域でゲセル風物伝説が語られている。その中に、フフノールのモンゴル人の住んでいるところは特別に多い。1982年、「ゲセル」研究者が初めてフフノール・モンゴルのゲセル風物伝説の現地を訪ねて以来、今までにおよそ100篇（同じ内容のものも含む）のゲセル風物伝説が刊行された。

伝説は歴史上の事件、人物、年代の真実の記録ではないが、しかし、この三つの要素に基づき歴史の真実を現したように人々には感じられる。伝説がその地方の自然風景、習慣、歴史事件などを歴史的人物、地元の著名人と関連させて説明する特徴がある。しかし、フフノール・モンゴルのゲセル風物伝説は、チベットに由来する「ゲセル伝」の主人公と彼らの物語のプロットに基づいて、自分たちの故郷の山水などの自然風景、風俗習慣、生活上のある物事の由来を形象による具体的な思惟で説明して語ったものである。この特徴からフフノールのゲセル風物伝説の作られた内在原理を探求しようとしている。モンゴル人が「ゲセル伝」を語る時のタブーとゲセル風物伝説の信仰対象である山、川などの自然物、関連させて語られている生活の中のある習慣、行事などに対する人々の信仰心を説明し、モンゴル人がゲセルという文学作品の主人公に対し抱いている敬慕感と恐怖感を述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は200年余りに及ぶモンゴル英雄叙事詩「ゲセル」研究の中で、従来調査研究の遅れから全く取り上げられることのなかった中国・青海省のフフノール・モンゴル「ゲセル」に着目し、自身が調査グループの一員として参加し、現地で収集した口

語資料に基づき、従来の数多くの「ゲセル」資料と詳細な比較研究を行った結果、フフノール・モンゴル「ゲセル」がモンゴル「ゲセル」研究全体において欠くことのできない重要な地位を占めることを証明するとともに、まだ十分に研究されていないモンゴル「ゲセル」の発生、形成、発展という大きなテーマに対し、全く新しい視点から実証的に解明しようと試みた力作である。これは従来のモンゴル「ゲセル」研究の欠点を大きく補うとともに、筆者の長く豊かな研究歴に支えられた独自の新しい見解であり、最も特筆すべき点である。

第1章では、チベット「ケサル」とフフノール・モンゴル「ゲセル」資料との比較を通して、モンゴル「ゲセル」がチベット「ケサル」に由来することを内容面から明らかにした。さらに、フフノール・モンゴル口頭「ゲセル」資料を内容から16章に整理分析し、そのうち、チベット「ケサル」やモンゴル書面「ゲセル」と内容的に対応するものが6章、残りの10章がフフノール・モンゴル独特の「ゲセル」短編叙事詩であるという、今後の「ゲセル」のプロット研究に一つの新たな方向性を提示した点は評価できる。

第2章では、1716年の北京木版「ゲセル」が分析の結果、フフノール・モンゴル「ゲセル」と基本的に同一起源に遡ることを明らかにし、また、北京木版「ゲセル」の由来に関して、これまで諸説があるが、従来のCh.ジャムツァラノの記した言い伝えに様々な角度から分析を加え、「フフノールにいるウールド部以外のモンゴル人が語ったものを記録した」と自らの見解を明らかにした。これは、かつて存在していたとされるフフノール・モンゴル書面「ゲセル」がいまだ発見されていない以上、今後とも議論を呼ぶ問題であろう。

第3章ではフフノール・モンゴル口頭「ゲセル」をブリヤート口頭「ゲセル」と比較した結果、ブリヤート「ゲセル」の方がより完全な形で残っていることから、フフノール・モンゴル「ゲセル」が、伝承という点からすでに衰退段階に入っていることを明らかにした。

第4章では、フフノール・モンゴル口頭「ゲセル」を当地の英雄叙事詩と比較分析するという手法を取っているが、これは、フフノール・モンゴル書面「ゲセル」が発見されていない現在、できうる限りの最も手堅い手法であると高く評価できる。

第5章では、フフノール・モンゴルのゲセル風物伝説を取り上げ、フフノール・モンゴル人がゲセルに対して特別の信仰心を持っていることを明らかにしたが、これも筆者のフィールドワークから得られた成果と言える。

最終章で、筆者は結論として、フフノール・モンゴル口頭「ゲセル」という新しい資料をモンゴル「ゲセル」研究の中にはじめて取り入れたことにより、モンゴル「ゲセル」の発生、形成、発展に関し、13世紀以後、モンゴル人がフフノールへ侵入し、モンゴル人とチベット人が多面的に接触した結果、チベット「ケサル」が最初にフフノール・モンゴル人に伝播し、それが原型となって、その後、継承と改変という様々な変化を被って、モンゴル全域に広まっていったとする新しい見解を提出することに成功している。

本論文は、口承文芸のもつ流伝という移ろいやすい本質的性格に起因するところの難解さを、自らのフィールドワークによる経験から得られた新資料と従来の数多くの

資料を詳細に照合し、比較検討することにより、見事に克服し、モンゴル「ゲセル」研究史に一石を投じたことは、全く疑いの余地のないことであり、本論文が博士（言語文化学）の学位にふさわしいものである点について、審査委員全員の意見の一致を見た。